

# 「感性」育てへの試案

～様々な感覚刺激による学生の「気づき」を中心に～

平嶋 一臣

## A Tentative Plan to “KANSEI” Education

～ Focus of Student's Notice by Various Sense Stimulation ～

by

Kazuomi Hirashima

### はじめに

21世紀も中盤にさしかかろうとしている今、世界の隅々までAIの波が押し寄せている。そこから発信され生まれていく新文明の深化は、人々のより豊かで便利な生活とともに国々の繁栄をもたらすであろう。

一方で、この新文明化は心無き者に利用され、時に人々を不幸に陥れるといった事件をもたらしている。AI時代の到来に期待すると同時に、少なからぬ不安を抱いているのは私だけではないはずだ。

私は、AI時代の到来を全て否定するものではない。このことと並行しつつ、倫理観に根差した創造的な生き方を意識していかなければ、人間的退化・退廃へと繋がるのではと危惧するのである。

このような時代だからこそ、今我々人間界に何が求められているのか、その求めに貢献する「教育の在り方」は如何にあるべきか、という根本的な指標とその根幹をなす哲学こそ、これからの指導者（教育者）に求められているのではなかろうか。その中に在って、「感性（教育）」こそが、人間性回帰の原点となり得ると私は考える。

私は、先の論文<sup>(1)</sup>で、この教育現場における哲学的命題の根幹に在るのは「感性」であり、その「感性」を、端的に言い換えるとすれば「気づき」である、と結論づけた。

では、教育現場で日々子どもと対峙する教師に限らず、我々誰もが一般的に日常会話で使用する「感性」の解釈は、果たしてどれほどの理解でもって発しているのだろうか。教師は、そう発言した後、「感性教育」をどのように推進しているのだろうか。日本人として多用している「感性」を、「感性教育」と絡めつつ具体的な方法と関連付け論じていく。AI時代の到来の中にあって、「感性（教育）」こそが、人間性回帰の原点と信じるからである。また、論題中の「感性」英訳を「KANSEI」としたのは、一般的な英訳では、日本語感でいう「感性」とのズレを感じていることを付記しておく。<sup>(2)</sup>

---

受理日：令和元年11月30日

純真短期大学こども学科特任教授 純真学園大学客員教授

## 1 序論

日本の高等教育機関で皆無に近い状態であった『感性学』講座を、今年度初めて本学に開講できた。<sup>(3)</sup> 対象は、こども学科1年生、前期15コマである。シラバスは次のとおりである。

### 『感性学』シラバス

#### 授業の概要

21世紀は「感性」の時代と言われている。では、「感性」とは一体何だろうか。また、なぜ今になってこの言葉が重要視されるようになったのだろうか。そこには「人間関係の希薄化」「自然体験（活動）の形骸化」「人権感覚の欠如」と、自由な発想力の低下となっている現状打破を望む声があるのではなかろうか。生を受けた「ヒト」が、やがて「人間」へと成長していく過程で最も大切な学びは、人間的な感性（学）の享受に基づく自己変革にある。そのためにも、「感性」「感性教育」の解釈や学びは、曖昧なままでは済まされない。授業では、「感性」の意義、「感性」とみなされ易い場面、「感性」の育て方など、個々人の持つ「感性」を発展深化するための具体的な方法を、参加体験型の方法を採りいれながら進めていく。その結果、各自が『自己の在り方』『人間の在り方』という、人間的根本課題について、明確な考えを持つことができる授業とする。

#### 授業計画

- 1 オリエンテーション・「感性」の時代がやってきた 「感性」に関するアンケート
- 2 「感性」についてのさまざまな研究事例を知る（感性哲学の基礎）
- 3 義務教育期における「感性教育」の実態を知る（感性育ての可能性）
- 4 日本の伝統文化・芸能および言語文化（能・狂言・短歌・俳句）に表われる作者の感性①
- 5 日本の伝統文化・芸能および言語文化（能・狂言・短歌・俳句）に表われる作者の感性②
- 6 西洋音楽・日本音楽の世界に潜む感性
- 7 人間力・コミュニケーション能力と感性との関係
- 8 人権感覚と感性（教育）との相関
- 9 幼児期における感性育て（脳生理学的視点を中心に）
- 10 文学（主に随筆・小説）の中に表われる作者の感性
- 11 情報化社会における感性の在り方（映像・メディア・マスコミの態様を中心に）
- 12 「書」に表れる作者の感性（「書」は人なりと言うが・・・）
- 13 スポーツマン・芸術家と感性（倫理観・空想力との関連を中心に）
- 14 感性および感性教育の今後（これまでの学習を基に、「感性」「感性教育」について自分の考えをまとめ、次時の発表に向けて準備する）
- 15 まとめ（「感性」「感性教育」の今後・私の考える箴言・格言などをテーマに各自発表を行い、質疑応答を受ける）「『感性学』の受講を終えて」と題しレポートを書く

## 16 定期試験

以下、授業の中で、「覚える学習」ではなく、学生が何に「気づき」、これまでとはどこか異なる自分が何を「考え始め」たのか、を中心に本論を進めていく。ここでは、多分野の教材を収集し学生の感覚を通して感覚を揺さぶった。「感覚の揺さぶり」が、学生個々人が本来持っている「感性」を呼び覚ます誘導法に繋がり、これ以外にはないと考えるからである。

本論では、紙面も限られており、15回の授業で提出された学生のレポートの中から、次の3つの段階に沿い、2段目で具体的な5つの授業内容と学生の反応に絞り、「感性」をいかに誘っていったかについて論じる。

1段 初回授業の学生アンケートの趣旨

2段 各回授業後の気づき（15コマの中から5コマを取り上げる）

3段 15コマ全授業終了後の学生の「学び」の姿

## 2 本論

### (1)初回授業の学生アンケートの趣旨

『感性学』の授業がスタートした。この初の講座を希望してきた学生は25名であった。25名の学生がこの授業に何を期待しているのか、また、「感性」「感性教育」について、どのような意識をもっているのかについて、初回に尋ねた。将来幼い子を預かる職業に就く学生にとって、初発の意思確認は重要である。また、この「期待」と15回のシラバス内容とは深い関係がある。受講希望者対象に行ったアンケート調査の内容は次の9項目で、「子ども」「子育て」「教育」といった、幼児期育に関するキーワードを意識して織り込んだ。

- ① 「感性が豊かな子」とは？
- ② 「感性の豊かな子」を望む理由は？
- ③ 「感性が悪い」という言い方は有ると思いますか？「ある」「なし」とその理由
- ④ あなたが、「感性」や「感性教育」の語を使う頻度は？
- ⑤ ④で使っている場合、どんな使い方をしていますか？
- ⑥ 「感性」とは何ですか？
- ⑦ 「感性」からどんな語を関連して思い浮かべますか
- ⑧ 「感性」の大切さを感じたことが有りますか？「ある」の場合はその場面
- ⑨ 「感性」「理性」「知性」子育てに最も大切なものが有りますか？「ある」「なし」とその理由

授業の冒頭で「感性・感性教育とは一体何だろう？ そのことを念頭にアンケートに答えてください」という問いかけに、多くの学生に戸惑いが見られた。わずか15分間のアンケート調査ではあったが、予想した通り学生にはかなり疲れた様子が見られた。とは言え、爾後15回の授業を受けるにあたり、学生の受講への意識づけをしっかりとっておきたいという意図もあり、ここは大切にしたいかった。

アンケート結果の集計と分析は、後記・15回受講後の「振り返り」レポートの中で発した学生の言葉に替えることとする。

## (2)各回授業後の気づき(15コマの中から5コマを取り上げる)

ここでは、15コマの授業の中から、5つに絞ってその簡単な流れと、私の学生への設問および学生の反応（毎回3段階にわたる感覚刺激後の報告レポートが中心となる）を取り上げることとする。

### ① 口語自由律俳句評と創作（シラバス4から）

#### i 授業内容

福岡が生んだ自由律俳句のパイオニアともいえるべき吉岡禪寺洞を採りあげる。本時前段で、定形俳句として学生にもなじみの深い芭蕉・蕪村・一茶・子規を採りあげ、その作風の違いを掴んだところで、「実はこんな俳句も・・・と、福岡出身の俳人・吉岡禪寺洞の生い立ち・俳句遍歴・代表的な作品を提示し<sup>(4)</sup>、口語自由律俳句の世界を学ぶ。

#### ii 設問

「資料にある禪寺洞の九句中、あなたにとって最も場面が浮かぶ・想像できる句を一句選び、禪寺洞に代わって200字小説に書き直しなさい」

「九つの句を読んで、そこから禪寺洞の人柄を、自由に想像しなさい」

「あなたが日頃思っていること・呟いていることを、自由律俳句で表現しなさい」

#### iii 学生の気づき（学生のレポートより）

- ・こんな俳句（自由律のこと）があることを初めて知った。
- ・俳句はやはり五・七・五の方が作りやすい
- ・自由律は一行の詩みたいで面白い。
- ・自由すぎる俳句文学までが、戦争中は厳しく取り締まれる時代だったのですね。
- ・「自由」は、却って難しかった。私には、決まったリズム（五・七・五のリズムのこと）で作る定形俳句の方が作り易い。

### ○学生の自由律俳句作品（受講者から提出された俳句の一部）

寂しさでできた穴に北風が凍みていく  
いつもの帰り道 痛すぎる風が まともすぎる  
亡き父の残していったラジオがもう聞こえない  
気づけば闇に包まれている私の影と話している  
手放せない青春の思い出はスマートフォンの中に  
兄の旅立ち 寂しすぎる家ばかりが残った  
必死に握られたペンが見上げる授業中の私  
強がっている自分に気づく学校帰りの坂道  
空を見上げると気づかされる いつもちっぽけな私  
ガラス越しの愛のささやきはいつも初々しい  
傘が無くても夕立の中に飛び出したい時があります  
「たまにはこっち見てよ」と私に呼びかける道端の花

眩しさいっぱいのオレンジ色の空を独り占めして帰る  
 時間は過ぎる 思い出はそのままにして

## ② ムソルグスキー曲『展覧会の絵』を題材に命題法を行う（シラバス 6 から）

### i 授業内容

一風変わった作曲家（と学生には紹介）・ムソルグスキーによる積極的標題音楽ともいえる組曲『展覧会の絵』<sup>(5)</sup>を学生に聴かせる。

### ii 設問

絵の展覧会場に行った彼は、会場に並ぶ絵を見ていて、いきなり湧いてきたインスピレーションで五線譜に音符を書き始めた。その時の曲が『展覧会の絵』として、現在も演奏され続ける名曲の数々である。その中から五曲を選び、学生にその曲がどういう場面に映るかを想像させ、それぞれに題名をつけさせる。いわゆる命題法である。もちろん正解はない。強いて言うなら全員が正解である。各自が題名を紹介した後、その違いや共通点を自由に話し合うための素材づくりにすぎない。

### iii 学生の気付き（学生のレポートより一部）

曲 1 の命題・・・恐れ・クレオパトラ・反乱・嵐と舟・せまりくる恐怖

曲 2 の命題・・・目を閉じた女・独りぼっち・没落貴族・森の中・涙の人々

曲 3 の命題・・・新しい朝・幸せなパーティー・小鳥たち・花畑と蝶

曲 4 の命題・・・跳ねる兎・細い道・逃げる犬・追いかけてこ・逃走・遅刻しそう

曲 5 の命題・・・冒険・勇気を出して・パーティー会場・追われる・競馬場・戦

ちなみに、ムソルグスキーがこの時見た絵は、**曲1「こびと」、曲2「古城」、曲3「チュイルリーの庭」、曲4「卵の殻を付けた雛」、曲5「リモージュの市場」**である。

以下は、バラエティーに富んだ自分たちの命題を振り返り、学生の感想である（一部）。

- ・ 偶然に似た題名もあったが、ほとんどはどの曲も違ったようにみんなが聞いていることが分かった。私たちは、こんなにも考え付くのが違う人の集まりだったのだ。
- ・ ムソルグスキーさんは、それぞれどんな題名の絵を見て作曲したのか知りたくなった。
- ・ 音楽と絵とがこんなに近いものとは考えたこともなかった。
- ・ 音楽を聴くと景色を想像したりすることがあるが、これとよく似ていることなのかあと思った。

## ③ 能『隅田川』を鑑賞し、その演出法について、父・世阿弥と息子・観世 <sup>もとまさ</sup>元 雅 との意見の対立をどう考えるか。（シラバス 5 から）

### i 授業内容

能『隅田川』前半部のあらすじを紹介。次にラストシーンをDVDで鑑賞する<sup>(6)</sup>。このラストシーンで、誘拐され東国まで連れさられた後、落命した我が子梅若丸の墓前で、母が経文を挙げると、墓（の後ろ）から梅若丸が姿を現す。物狂いからとけた母は我が子に抱き着こうとするが、目の前の我が子は、母親の手をすりと抜け姿は消え失せてしまい、残るは眼前の塚（わが子梅若丸の墓）のみであった。

### ii 設問



この演出方法について、作者元雅と父世阿弥とは対立をする。世阿弥は、亡くなった息子の姿を出すべきではない。ここは母親の演技のみでよいという。元雅はこれに反対をして、息子の姿を観客に見せる手法を採る。この二人の対立について、学生はどう考えるのか。自分が演出家としたら、世阿弥・元雅両名の演出のどちらを採るか、その理由と共に考えをまとめるように指示。

iii 学生の気付き（提出レポートより3名）

- ・ここは母親の心を汲むべきで、会いたい一心で東国まで来たその気持ちを考え、観客もここは、我が子梅若丸の姿を見たいと考えるだろう。亡くなっているが、舞台演出としては、ここで梅若丸を登場させるほうが良い。
- ・世阿弥は、あくまでも事実を舞台上で演じる方がよいと考えたのです。そこで、亡くなった子どもが生き返ったような印象を与えると、何となく興ざめになると思ったのではないのでしょうか。私も世阿弥の考えが、母の悲しさを増すことにつながり、それが観客に伝わると考える。
- ・作者がここで亡くなった子どもを再び生き返ったように現わすのは、やはり、感情面で母親の気持ちに添ったのではないのでしょうか。作者の考えは、他にも何かあるような気がします。よくは分かりませんが、私はどちらかというと、息子・元雅の演出に賛成します。

これら3つのパターンに、受講者25名の意見はほぼ集約され、その内3分の2ほどの学生が、梅若丸がたとえ幻影であっても生き返ったような形で舞台上に登場する演出法に賛成していた。この元雅の演出の理由は、確かなことは分からない。だが、このように舞台演出法については、昔から今に至るまで様々な考えや手法があることを、学生も気付いてくれたことであろう。これを機会に、日本の古典芸能に少しでも興味を持ってくれば、と考える『隅田川』を題材に、学生の「感性」を誘った授業である。

④ 自分の感性の形成期について問う（シラバス9から）

i 授業内容

幼児期・児童前期にこそ、たくさんの感覚刺激をさせたい。このことが「感性」育てに、大きな影響をもたらすという仮説のもと、個々の学生に過去の振り返りと、そのことがもたらす現在の自分への影響を中心に考えさせた。

ii 設問

「本講座3回目の授業で、義務教育期における『感性』育てについて勉強した時、たくさんの経験や体験が関係している、とほとんどの人が書いていました。つまり、『感性育て』は後天的に可能という意見になります。仮にそうであれば、みなさんの現在持っている『感性』は、幼い時のどんな経験や体験が影響を及ぼしているのでしょうか。可能な限り過去を振り返り書いてください」と、学生に問いかけた。

iii 学生の気付いた、自分の「感性を育てたもの」（提出レポートより5名）

- ・ 自分の感性を育ててくれたものは音楽だと思います。中学時代に私は吹奏楽部でフルートを吹いていましたが、すごく下手でした。やる気がなくサボりがちな私を根気強く教えてくださった先生に、今は感謝しています。今でも J・P O P だけでなく、クラシックやロックなど幅広く音楽が好きなのも、あの時があったからだと思います。
- ・ 高校の3年間、サッカー部のマネージャーをしました。中身の濃い高校生活でした。選手・指導者・保護者と、全員のサポートをする大変な仕事でしたが、その分「ありがとう」という、たった五文字の言葉もすごくうれしく感じる事ができるようになりました。
- ・ 物心ついた時には、常にクレヨンを持っていました。私は幼い時から絵を描くことが好きだった。毎日のように家族の絵を描いた。5歳にもなると粘土で遊ぶようになった。幼稚園から帰るころには爪の間にいつも粘土が詰まっていた。小学校に入学すると、更に画材や描材の幅が広がった。絵の具・墨・木・石・鉄・石膏と様々な感触を覚え作品作りに没頭しました。私は下の弟が生まれてからは、母の子育ての負担にならないようにと、祖父母の家で生活することが多かったのですが、祖父母との生活で、私はたくさんのことを学びました。足の悪い祖母と出かける際はゆっくりと歩いたり、大工をしていた祖父の余った木材で引き出しを作ったりして遊びました。
- ・ 家の周りは広かったし牛を飼っていたので、自分の感性を磨くのに十分な環境だったと思います。保育園からは、友達の影響でピアノ、10歳からは習字も習い始めました。今思えば、芸術・自然・動物など、たくさんのことに関わることができたのが私の感性を育んでくれたように思います。
- ・ 私はたくさんいる従兄弟の中で二番目に年長だったので、大勢の幼い従兄弟の遊び相手をさせられました。当時は私も幼かったのですが、年上だから従兄弟たちが楽しめるように考えながら遊んでいました。その経験が、相手の気持ちを考えながら行動するという私の今の感性を育てたように思います。

◎ここでは5人の「私の感性を育てたもの」を採り上げた。アンダーラインの箇所をみても、自分の感性を育んだ原点が、様々な倫理的・芸術的・生産的な活動に端を発しているのでは？ と学生は認識し始めている。

##### ⑤「感性」膠着語集より、自分の「気づき」を分析する（シラバス 14 から）

###### i 授業内容

自分は、どのようなときに「感性」を使っているのか。また、その時にどういう意味で使おうとしているのか、感性膠着語集<sup>(7)</sup>から選び独自の解釈を報告させる。友人との認識の違いがあるかもしれないが、この違いに気づくことも大切なことである。

###### ii 設問

「感性膠着語集を作ってみました。これまで 500 を超える『感性』という語にくつつく日本語を見つけました。この中から、自分では使った膠着語が無ければ、その意味について自分なりに説明してください」

と設問。私がこれまでに集めた、544 個の膠着語の中から、学生に選ばせ、説明できるものを 200 字レポートにまとめ発表させた。

iii 学生の気付き（学生のレポートより 10 名）

- ・「感性を養う」・・・本を読んだりミュージカルを観たり、絵を描いたりなど、想像力を働かせるときに使う。何かについて深く考えるとき「感性が養われている」ようにも解釈する。
- ・「感性が豊か」・・・周りの状況の変化に気付くこと、自分の考えをしっかりと持つこと、周囲の人が困っていることに気付くこと、周りの人に流されず自分の意見を持っていることではなかろうか。
- ・「感性に目覚める」・・・これは、自分の持っていた才能が一気に開花した時に使うものだ。自分の得意なものを見つけることができず、いろんなことを経験して、初めて自分の才能に気付いた時に使える語だ
- ・「感性が無い」・・・私はこれを「センスが無い」の意味に解釈する。きっかけは友人だ。ある友人は、自分の意見と違うことを言われるとすぐに「センスが無い」と言う。人それぞれの考えがあるのに、「センスが無い」なんて言われると少しムッとなる。
- ・「感性で生きている」・・・この言葉は、誰からも何からも縛られることなく、自由に生きている人のことを表すときに使うと思います。素晴らしい生き方で、私もそのように生きてみたい。しかし現実はそうはいかないと思います。
- ・「感性を磨く」・・・私はこの言葉に馴染みがあり、私自身も使っている。ここまでの授業の中でも提出レポートで使うことが増えたようです。人は感性を磨くことによって、心が豊かになり人に優しくなれると私は思います。
- ・「感性で受け止める」・・・物事を頭で考えて解釈するのではなく、目の前の物事に対し、どう感じ、何を思ったかという感情で判断し受けとめることだと解釈します。私も頭でばかり考えず、時には心で感じたことも大切にしたいと思いました。
- ・「感性の塊」・・・時々こういう人に出会います。人は皆、それぞれの感性を持っていると思いますが、この人は、感性を強く、たくさん持っていて、それが一体化しているような人のことです。
- ・「感性を研ぎ澄ます」・・・私は、今いる環境から一度離れてみます。静かな場所一人で、ホンモノ（プロの楽団や作品の触れるなど）に、普段の日常から非日常と、新しい刺激を受けることで、感性が研ぎ澄まされ豊かになると考えます。
- ・「感性が刺激される」・・・私は、珍しいものを見たときや、感動したときに、この言葉を使う。日本舞踊の先生の踊りを見たときに、よく使っていた覚えがあります。その刺激を学びに変えて日々練習に励んでいたことを思い出します。



◎学生のレポートの中のアンダーラインを引いた部分に、「感性とは?」「感性教育とは?」に繋がるヒントが在るようだ。しかし、ここではつぶやきともとれる学生の感性への言語的アプローチを分析する余裕がない。いずれ、このような学生の関心に近い感性への定義（めいたもの）を中心に論を起こしたいと考えている。

### (3)『感性学』15 コマ受講して、学生の学びと振り返り

『感性学』15 回の授業を受講し、学生にどんな成長・変化・学びが有ったのか（無かったのか）、今後に期待するものを含めて自由に書いてもらった。16 名のレポートをダイジェストして次に列記する。

- 1 回目の授業のときよりも、自分の考えや気持ちを周りの人に表せるようになりました。それと同時に、自分の気持ちを上手に誰かに伝えることが難しいことも分かりました。感じ方は人それぞれで、人間は面白いと思いました。たくさんの絵や映像作品を見たり音楽を聴いたりしたのも楽しかった。これからも、自分の感性を大切にしながら生きていきたい。
- 毎週金曜日の 4 限目は、自分の感性が磨かれ脳が活性化される楽しい時間でした。感性学を学び始めてからというもの、日常の中で様々なことを体験すると、「あ、今、私の感性が少し豊かになった」とか「これ、感性が刺激される経験だ」とか、自分の感性を意識することが多くなりました。授業は終わってしまいますが、これからも、日々感性を磨いていきたいと思います。
- 感性というものは、はっきりした答えはなく曖昧なものです。しかし、だからこそ様々な視点や解釈があることを理解し、想像力を広げ、無限に存在する「答え」に思いを馳せ、行いこそ大事なんだと思いました。座って詩や小説や音楽に触れることも大事だけど、外に出て自分の体で自然に触れることも大切だと気づきました。
- 感性学の授業は、自分の考えや思いを文章にしていくことで、自分でも今まで考えたこともない自分を知ることができた授業内容でした。15 回を通して、自分がどういうものに心惹かれるのか、何を見てどう感じているのか、自分自身のことをたくさん理解できた気がします。自己理解は保育者には必要なことです。感性学を選択して良かったと思っています。
- 私は感性学を 15 回受けることができて良かったです。普段の生活の中で、音楽・絵・短歌・俳句・書・映画など、作者の感性が深く関わっているものに触れる機会が少ないので、自分の知らなかった自分の感性を知ることができた気がします。15 回の授業の中で、いろんな方の人生観や人生論を学ぶことも何回かありました。そこで、自分の考え方とは違う友達の考え方を知ることで、今後の人生に生かせるなあと感じました。
- 自分の感性は、皆の感性とは当たり前のように違うということを、学ぶことができました。友達の感性を知るたびに、自分とは全く違うことに気付きました。そんな時、（この人は、私とは合わない）ではなく、（こんな考えもあるのか）と気付くだけで、素晴らしい人生を送ることができるようです。自分の人生に自分の感性は必ず付いてくるということを忘れずに、これからも毎日を過ごしていきたいと思いました。

- 様々な思いを表現して伝えたり、自分が自分に気付いたり、自分を見つめなおす時間でした。この授業を受けてから、「感性」を意識するようになりました。これから私は保育者として社会に出ます。そのための知識や技術も大切ですが、それ以前に、感性豊かな自分づくりをすることを大事にしていきたいと思います。
- 第15回目までの授業を受けて、本当にいろいろな分野に対する考え方が変化し、感性豊かになったと思います。毎回の授業後、感想や新たな気づきを書いたことについて、次の週に、先生が「前回の授業のレポートにこんなのがあったよ」と言われ紹介されました。そこでは自分とは違う考え方が沢山あって良い刺激になりました。自分では思いもつかない考え方や捉え方をしている友達がいることを学びました。
- 考えることばかりではなく、閃いたり悩んだり感じ取ったり匂ったり見たりして、本当に五感が研ぎ澄まされる授業でした。脳を刺激し活発化することで、将来保育現場でも、子どもたちに負けず劣らず小さな幸せを見つけられる保育者になれそうです。
- 「感性」とは、とても難しいものだと思っていました。しかし、授業が進むにつれて、一人ひとりが思ったこと、それが「感性」につながることを知って、「感性」とは無限の自由であることに気付くことができました。自分の持っている「感性」、友だちの持っている「感性」について、もっと知りたくなりました。
- 入学して良かったと思えた授業でした。一つの物事について、ゆっくり深く考えることの大切さを忘れかけていたからです。毎回の提出レポートに、思いを吐き出すことによって、自分は一体どんな人間なのかを知ることができました。下手な文章を、毎回たくさん誉めてくださって有難うございました。おかげで回を重ねるごとに思いっきり書けるようになりました。保育の知識は、調べればいくらでも増やせます。しかし、感性は自分が意識して見る目を持たなければ、育むことはできないことを改めて学びました。
- 音楽・文学・絵画・と、様々な分野に触れ、感性を刺激されました。世界中の感性教材に触れ、教養が身についたのは勿論ですが、自分を掘り下げたり自分と向き合ったりして考える大切さを学ぶことができた授業でした。日々、生活していく中で、気付かずに流してしまう問題とじっくりと向き合える時間でした。感性学で学んだ「考えること」は、今後の自分の人生にとって大切な宝です。
- 最初の授業の時、何を書けばいいのだろう、とか、先生はどういう答えを求めているのだろう、と正解を書こうと焦っていたけど、だんだんと、自分の思ったこと、考えたことを素直に書けば良いのだという気持ちになってきました。映像や音楽・書・絵・詩など、いつもはただ見たり聴いたりするだけのものだったけど、想像して自分の思いを表現するのが楽しくなってきました。想像を書くという機会はありませんので、自分を表現できるいい機会になりました。
- 「感性」の正解は幅広いことが分かりました。自分がこんなことを考えるのか、こんなことに興味を持つのかなど、自分と見つめ合うことができました。毎時間、たくさんの発見があり楽しかったです。「感性」について、自分の中で“これだ”と

いう答えは見つけていませんが、生きている間にもっと探してみようと思います。  
 いろんな自分探しを続けて納得のいく答えを見つけたいと思います。

○感性学の授業は、とても新鮮なものでした。保育士になるのだったら、感性が一番大事なんじゃないかな、と思いこの授業を履修しました。毎回面白く、履修して良かったです。しかし、思いをなかなか文章にすることができず、もどかしい時もあり、もっと語彙力が欲しいと思うこともしばしばでした。この授業で学んだことを忘れずに、これからも私の感性を大切にしながら過ごしていきます。

○一回目の授業で、(こんなに長い文章を書くのは苦手だ。自分の意見をストレートに言うのは恥ずかしい) と思っていました。しかし、15回の授業を通して、自分の思ったままを文章にすること、先生の設問に対して自分なりに考えてみること、このことがすごく楽しく、少しも苦にならなくなりました。先生は「感性とは気付きでは？」と、言っておられました。自分も身の回りのことに目を向け、気付き、行動することを心がけるようになり始めました。

### ◎15 回受講後の、学生の『学びと振り返り』から見えるもの

上記学生の最終レポートのアンダーラインは、私が『感性学』の授業で意図していたもの（こと）に関連すると思われる部分である。そうすると、『感性学』とはつまるところ、『倫理学』『教育方法論』『人間学』『哲学（美学）』『芸術学』と相重なるのではないか、という意見もあるだろう。しかし、『感性学』は、それらの学問のさらに基盤に位置するものだとは私は考えている。そのため、本講座では、様々な五感の刺激を試みる時間の設定を何よりも優先しており、この五感からの「感づき」を「気付き」に総合化し実生活に適合すべき『悟性』<sup>(8)</sup>として客観視し、最終目標の『感性』へと繋げていくものである。

学生が、様々な角度から感得した授業後の振り返りの言葉の中にこそ、ホンモノの『感性学』に繋がる多くのヒントが隠されている。

## 3 結論

小説・随筆・コラム・詩・俳句・短歌・音楽・絵画・能・狂言・歌舞伎・落語と、できるだけ幅広く授業の教材を集め、学生の感覚を毎時間刺激した。毎授業後、たくさんの量のレポートを書くことで、感覚でとらえたことを文章化する困難さを、学生は体験したに違いない。とは言え、毎時間レポートを書き進めていくうちに、自己客観視は回を重ねるごとに確かに深化していった。私はこの「自己客観視できる人間」へと深化・発展することこそ感性伸長の証であり、「感性教育」の成果と考える。

一人ひとりの「感性」に優劣はない。それだけに若い受講者である学生は、毎回の自分の考えに自信をもって答えるよう促した。その結果、本論（3）の『学びと振り返り』で見られたように、めいめいが自己の「感性」を少しずつ鮮明化し客観視し始めている。また、「感性」が人の生き方のバックボーンとなりうるという意識に近づいてきていることも伝わってくる。

学生の気づきにもあるように、感性・感性教育の場はどこにでも転がっている。『感性学』の授業を終え後も、学生には今後も引き続き「感性育て」への感覚刺激教材と資料探

しに自ら邁進してほしい。それこそが、本学がここに初めて起こした講座・『感性学』の存在意義なのである。

### おわりに

初めは聞きなれない『感性学』という講座名を見て、受講登録したものかどうか、迷った様子が、最終回のレポートからも伺える。それほど「感性」そのものにまだ馴染みが無く、具体的なイメージが浮かばなかったのであろう。そのことを意識しつつ、15コマの授業を、できる限り学生のやわらかい感性に響く教材と資料集めに努めたつもりだ。

「感性とは感覚の総合がそのベースである」という前提の基、学生に様々な感覚刺激を行った。学生の「振り返り文」にあるとおり、毎回のレポートに私が批判することは基本的にはあり得ない。精一杯の意見や鑑賞には、私自身が学生になりきり、できる限り丁寧に返事を書いてきた。学生の感覚で掴んだ言葉を一端ろ過し、私なりに解釈することが、学生にとって爾後の新しい発想へと更に活性化していくことを知らされた。その意味においても、「感性」は「教育」するべきではなく「誘育」することが相応しいと考えている。

「指導」より「誘導」を、と言い替えても良い。「指導」には、どうしても指導者側の価値観の押し付けといったニュアンスを帯びている。殊に感覚の総合化を目指す『感性学』においては「誘導」を受けた学びの中から、主体的に取捨選択しつつ、周囲の友達や教師（ここでは私）に本音をしっかりと語れることが、何よりも大切なこととなる。その繰り返しのうちから、受講者（学生）はさらに高次の「感性」段階へと到達していくと、私は断言したい。

「感性を教育することは不可能である。なぜなら、感性はその人の持って生まれたものであり後天的な産物ではない」と考える方も居る。「感性」を「教育」の場に設定しようと大それた考えを持っておきながら、未だ不勉強な私は、この意見に完璧な反論ができない。ただ一言、「教育とは希望の連続である。希望としての教育を捨てることはできない。それが今の自分である」との言葉を返すのみである

パスカルは「神の存在」について、「可能か不可能か迷うならば可能にかけろ」と言った。私の「感性教育可能論」も、あるいはその論法に沿った、淡い期待に基づく授業法と受け止められるかもしれない。今後さらに実践研究を重ね、「感性教育」の可能性について具体的な提案に努めたい。

### 脚注

(1) 純真紀要 No. 58 (2018 年) P98

(2) 「感性」の英語訳として、一般的にこのように訳されている。

- 1 sense・・・the power to feel (感覚・勘・思慮・分別・物わかり・意向)
- 2 feeling・・・the sense of touch (触感・感覚・知覚・感受性)
- 3 emotion・・・a strong feeling of any kind (情動・感情・感動)
- 4 impression・・・an effect produced on the senses (印象・感銘・感動・感じ・考え・感想) impressionability (感受性) impressionism (印象派・印象主義)
- 5 suspect・・・imagine to exist (存在を想像・推察する)

以上の英訳・日本語訳は、研究社『英英辞典』『英和辞典』による。



※「感性」とは、ヒトの持つ最下層感覚・下層感覚・中層感覚さらに上層感覚を段階的に充実させ、その総合力により、外界をより確かに感じ取る自分に気づくこととし、これをさらに簡潔に言い換えれば、「感性」とは「気づき」である

と考える私は、上記の 1～5 の英訳では、日本語感の持つ「感性」を言い切っていないと考える。強いて英語訳をと言うのであれば、5 の SUSPECT に近い（ただし、「感づく」と訳した場合）。

(3) シラバスの基本は、本学園純真高等学校看護専攻科 1 年生対象に一昨年度開講した『感性哲学』と変わらない。ただし専攻科では、純粋な『感性学』というよりも、哲学史上でどのように「感性」が論じられてきたか、そのための具体的な手がかりを実験的に挿入するという手法を採った。短期大学での『感性学』では、この挿入した実験的な試みを、毎時間フルに教材として投入している。

また、ここで「皆無に近い」と言っているのは、先の論文でも示したように、九州大学大学院および早稲田大学で開講されている『感性哲学』を含んでのことである。詳しくは純真紀要 No. 57 (2017 年) P 38～P 39 をご覧いただきたい。

(4) 吉岡禅寺洞（本名・善次郎）

明治 22 年（1889 年）箱崎に生まれる。「俳句を一生の仕事」という信念を持ち続け、明治・大正・昭和と、俳句の芸術性を唱え訴え続ける。有季定型から新傾向へ、次には無季定型そして口語自由律へと立ち位置を変えていく。休むことのない俳句革新運動の一生であった。彼の創刊になる博多発の句誌・『天の川』（現・『あまのがわ』）には、彼の亡き後も現在に至るまで全国からの投句が続いている。禅寺洞が遺した句から、その一部を次に紹介する。

○母という名に生きてきた遺骨の かるさを抱く

○こがねむしが ねむっている 雲たちはパントマイム（天神・今泉公園に句碑）

○心電図は どうだったかと きいている すずめ

○妻の死 誰かれと話していれば 妻は生きている

○がんこな咳のあいま 白梅の瓶の位置をなおす

○夜明けの こおろぎが いそがしい わたしは死んではならぬ

○目がさめると いつも夜明けと思う 日暮れの 庭の雪

○季節の歯車を 早くまわせ スイートピーを まいてくれ

この内、後の四句は、禅寺洞最晩年の句で、「スイートピー」の句を最後に、彼は静かに息を引き取った。昭和 36 年（1961 年）3 月 17 日のことである。

(5) 使用した CD・組曲『展覧会の絵』は、カレル・アンチェル指揮・チェコフィルハーモニー管弦楽団 1968 年版・日本コロムビア製作

(6) 使用した DVD・能『隅田川』は、観世流・シテ梅若六郎、子方角当直隆 1977 年版、NHK エンタープライズ製作

(7) 我々日本人は「感性」という語を乱発する傾向にあるようだ。これまでの十数年間の私のメモにも、日常会話や小説などの文章（研究論文を含む）で使用された「感性」の語を含む熟語や「感性」が膠着する日本語を、既に 544 個見つけている。これを『感性』膠着語として一覧表に分類したものを次に示す。（紙面の都合で一部）



◎『感性』膠着語集（日本語での『感性』の使われ方） 2007年3月15日～2019年11月19日

**感性を** 育む（育成する） 培う 醸成する 強調する 切り売りする など計 45 個

**感性が** 高い・低い 有る・無い 優れている・劣っている 鋭い など計 32 個

**感性の** 哲学 時代 科学 本質 文化 訓練 回復 発達 トポス など計 100 個

**感性と** 理性 知性 表現 身体 イマジネーション 感覚 行動 など計 17 個

**感性で** うけとめる 描く 答える 生きている 買い物をする、計 5 個

**感性に** 訴える 響く 目覚める、計 3 個

**感性〇〇** 教育 学 哲学 工学 科学 物理学 刺激 表現 訓練 など計 56 個

**感性的〇〇** 体験 経験 表現 文化 生成 認識 性質 性格 到達など計 40 個

**〇〇的感性** 人間 科学 神秘 芸術 道徳 日本 日本人 知 生命など計 35 個

**〇〇感性** 食 若々しい 瑞々しい 潑刺とした ぼんやりとした など計 73 個

**〇〇の感性** 人としての 音の 絵の 色の 味の 個体のリーダーのなど計 76 個

**〇〇な感性** 豊かな 細やかな ユニークな立派な 爽やかな など計 33 個

**その他・熟語的使用** （単文節のみ）

感性に満ちた 感性との関わり 没感性的 感性としての市民性 見えない感性  
感性で聴く、など計 29 個

**総計 544 個**

（8）ここでは、一応カントの『感性』『悟性』『理性』という分類と解釈を踏襲する。

## 参考文献および図書

- アーサー・D・エフランド著、岩崎由起夫訳『美術と知能と感性』日本文教出版、2011年
- 井島 勉著『現代哲学双書・美学』創文社、1671年
- 石井義武著『勉強の仕方の研究』岩波ブックセンター信山社、1985年
- 遠藤友麗著『感性教育のすすめ』～心と知に働く豊かな感性の育成とその理論～2001年12月号特集
- 片岡徳雄著『子どもの感性を育む』NHKブックス603、1990年
- 片岡ハルコ著『感性と教育』三秀社、1990年
- カント著『判断力批判』岩波書店・カント全集8、1999年
- 桐田敬介著『感性を働かせながら』日本美術教育学会、2010年
- 倉戸ツギオ著『体験学習と感性教育』明治図書出版、2001年
- 桑子敏雄著『感性の哲学』NHKブックス914、2001年
- 小倉貞秀著『カント倫理学の基礎』以文社、1991年
- 酒井一郎著『ホリスティック感性教育によるコミュニティビジネス実践論』田園調布学園大学2005年p69-91
- 坂口光一著『リベラルアーツ講座「感性・こころ」』亜紀書房、2008年
- 佐々木健一著『日本的感性』中公新書2072、2010年
- シラー著・石原達二訳『美学芸術論集』富山房百科文庫11、1977年
- 高橋昌一郎著『感性の限界』講談社現代新書2153、
- 都甲 潔・坂口光一編『感性の科学』～心理と技術の融合～朝倉書店、2006年
- 中川弘泰著『感性を育てる教育』信州教育出版社、2013年
- 樋口聡著『身体教育の思想』勁草書房、2005年
- 牧野昇・高尾建次・松浦洋子共著『知性・感性・邪性』東洋経済新報社、1997年